

## 国内経済情勢

### 概観

設備投資の根強い増勢に加え、輸出も引続き増加傾向にあり、個人消費も底固く推移している。こうした状況下、2月の生産・出荷は大幅な増加を示し、雇用情勢も改善傾向を続けた。

3月の商品市況をみると、国際原料品市況の大幅軟化から関連品目(銅、鉛、綿糸等)が反落したが、商況全般としては、国内需給の引締りや原料コスト高を背景に小幅ながら続伸商状を呈した。3月の卸売物価は、海外安から非鉄(銅)が大幅に下落したものの、高値原油の入着に加え、原料高の製品価格への波及が進行したため、前月に引続き大幅上昇となった。3月の消費者物価(東京)は、米・麦関連食品の値上り等から上昇した。

金融面では、2月の全国銀行貸出約定平均金利は前月を上回る上昇を示した。一方、マネーサプライの伸び率は金融債等の金利改定待ちの資金滞留もあって前月比やや上昇した。

2月の国際収支をみると、経常収支(貿易収支季節調整後)は、前月をやや上回る赤字となったが、長期資本収支が既往最高の流入超を示したことから、総合収支の赤字幅はかなり縮小した。3月の為替相場は月中おおむね保合いで推移したが、4月に入りかなりの円安となっている。

こうした情勢の下、日本銀行は物価の上昇を極力抑止するため、金融引締め徹底と総需要の適

切な管理を図ることが適当と判断し、公定歩合を3月19日から1.75%引上げるとともに、4月1日から預金準備率の引上げを実施した。預金金利、国債金利等についても引上げが行われた。

### 生産、出荷はともに大幅増加

2月の鉱工業生産(季節調整済み、前月比\*、速報)、同出荷(速報)は、うるう年の影響もありそれぞれ+3.9%、+4.0%と大幅な増加を示した(前月各+1.2%、+1.6%)。この間、生産者製品在庫(速報)は+0.3%と小幅ながら6か月連続の増加となった。

\* 以下増減率は特に断わらない限り前月比または前期比(物価を除き季節調整済み)。

2月の財別生産、出荷の特徴をみると、資本財輸送機械(自動車、船舶等)の出荷が輸出増を主因に著増したほか、一般資本財(金属加工機械、繊維機械、電子計算機等)や耐久消費財(自動車、二輪自動車、カラーテレビ等)の生産、出荷も輸入需の好調を映じて大幅増加を続けた。また生産財(プラスチック、アルミ圧延品等)、建設財(鋼材、アルミサッシ等)についても、流通・ユーザー筋の在庫手当が進み、生産、出荷とも増加した。

この間、製品在庫の面では、生産財が出荷増から減勢を続けたものの、一般資本財、耐久消費財等は生産の高水準を背景に引続き増加した。

国内最終需要の動向をみると、2月の公共事業契約額(前年比)は前年が施行促進の反動から低水準であったことも影響して+41.2%の大幅増加となった(前月+37.1%)が、3月の公共事業請負額

(前年比)は+1.0%と微増にとどまった(前月+7.8%)。

設備投資動向については、2月の機械受注額(船舶・電力を除く民需)は、製造業、非製造業がいずれも前月大幅増加の反動から減少したため-7.2%の減少となった(前月+17.9%)が、前年同月比では+22.0%の高水準を維持している。また2月の建設工事受注額(民間分、速報)も+6.9%と4ヵ月連続の増加を示した(前月+16.5%)。

消費面では、2月の全国百貨店売上高(通産省調べ、前年比、速報)は寒気の滞留から冬物衣料品が続伸したほか、うるう年の影響などもあって+11.2%と前月(+11.3%)に続き2けた台の高い伸びとなった。3月の耐久消費財の売行きをみると、家電製品はカラーテレビ、ビデオテープレコーダー、ステレオ等を中心に引続き好伸した。また3月の乗用車新車登録台数(軽を除く、前年比、速報)もメーカーの拡販努力もあって+1.3%と高水準の前年を上回った(前月+1.6%)。

雇用情勢をみると、2月の有効求人倍率は0.78倍と前月(0.80倍)比やや低下したが、完全失業率は1.78%と前月(1.87%)をかなり下回り、50年3月(1.75%)以来の低水準となった。

### 卸売物価は大幅上昇

3月の商品市況をみると、非鉄(銅、鉛)、天然繊維、砂糖等が主として国際原料品市況の大幅軟化から反落したが、紙、石油化学、合繊、石油、鋼材、生コンなど多くの品目は国内需給の引縮りや原料コスト高を背景に上昇を続けた。このため、商況全般としては、前月より騰勢を鈍化したものの依然統伸商状を呈した。

3月の卸売物価は、+2.0%と前月(+2.6%)に続き大幅上昇となった(前年比+22.8%)。品目別

には、海外安から非鉄(銅)が大幅に下落したものの、原油の騰勢が尾を引いたほか、石油製品(C重油)、化学製品、窯業製品、紙製品、製材・木製品、金属製品(アルミサッシ等)でも需給引縮りの中で、原料高の製品価格への波及が進行したため引続き上伸した。

3月の消費者物価(東京、速報)は、季節商品(野菜)の反落や衣料品の値下りにもかかわらず、米・麦関連食品や鶏卵などの値上りが響いて+0.5%と引続き上昇した(前年比+7.2%)。

### 短期金融市場レートは一段と上昇

3月の金融市場をみると、銀行券は7,835億円の発行超と前年(同3,830億円)をかなり上回り、月中の平均発行残高(前年比)も+10.4%と前月(+9.7%)比やや伸び率を高めた。一方、財政資金は、国債発行額や外為会計の揚超幅が前年比拡大したものの、一般財政が前年を大幅に上回る払超となったため、20,963億円の払超(前年同15,359億円)となった。このため、月中の資金余剰額は11,939億円(前年同11,881億円)となったが、日本銀行は手形オペレーション等によりこれを調整し、市場地合いは通月引縮り基調を続けた。

こうした状況下、コール・レート(無条件物、中心レート)は、月央以降公定歩合の引上げもあって急上昇し、月中では+2.6875%の大幅上昇を示した(月末12.125%)。また手形売買レート(2山越)も月中+3.5625~3.750%と、同じく大幅上昇した(月末13.50%)。

2月の全国銀行貸出約定平均金利は標準金利の引上げもあって+0.136%と前月(+0.120%)を上回る上昇を示した。この間、マネーサプライ伸び率(M<sub>2</sub>+CD平残、前年比)は金融債等の金利改定待ちの資金滞留もあって+10.8%と前月(+10.6

%)比やや上昇した。

3月の公社債市況をみると、金利先高感による機関投資家筋の買控えから月央ごろまで軟化したあと、国債整理基金による国債買入れ報道が好感されやや持直したが、更月後は再び軟調に推移している。この間、国債、利付金融債等において4月発行債から発行条件が改定され(応募者利回り0.7~0.8%引上げ)、また長期貸出最優遇金利も4月1日以降0.7%引上げられた。一方、3月の株式市況は高値警戒感の強まりなどから大幅安となった(東証指数、月末454.46、月中-13.47)。

#### 経常収支の赤字続く

2月の輸出(通関、ドルベース)は、+7.9%と増勢を強め(前月+2.5%)、数量ベースの前年比伸び率も+23.2%と前月(+10.9%)を大幅に上回った。品目別には、自動車の前月減少の反動もあって大幅増加を示したほか、テレビ、合織(糸、織物)、化学製品等もかなりの増加となった。

一方、輸入(通関、ドルベース)は+10.5%の大

幅増加を示した(前月-0.1%)が、数量ベースでは前月に続き前年水準を下回った(前年比-2.3%、前月同-6.7%)。品目別には鉄鉱石、原毛等が現地ストの影響から入着減となったものの、原油をはじめ、非鉄金属鉱、木材等は前月減少の反動もあって増加した。

2月の国際収支は、上記輸出入の動向を映じて貿易収支(季節調整後)、経常収支(同)とも赤字幅がやや拡大した(各408百万ドル、1,497百万ドル)。この間、長期資本収支は対日証券投資の流入超などから既往最高の流入超となり、総合収支の赤字幅は840百万ドルと前月(同2,222百万ドル)比大幅に縮小した。

3月のインターバンク米ドル直物相場は、海外市場においてドルが主要通貨に対し全面高となる中で、月中おおむね保合いを続けた(月末249円70銭、月中10銭の円高)が、4月に入りかなりの円安となっている。

(昭和55年4月11日)